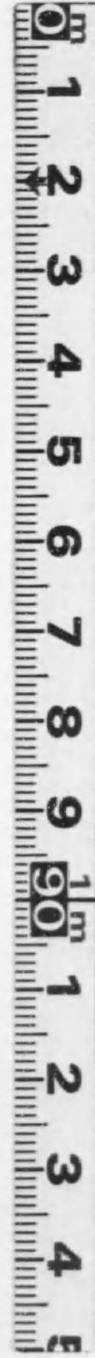
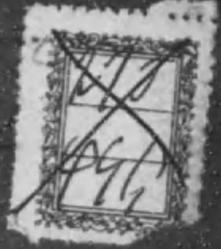


特116

709

觀世流改訂法本

竹山
朝長
阿漕
拾



始



特116

709

竹生島

朝長

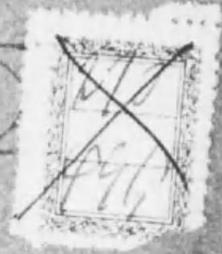
姨捨

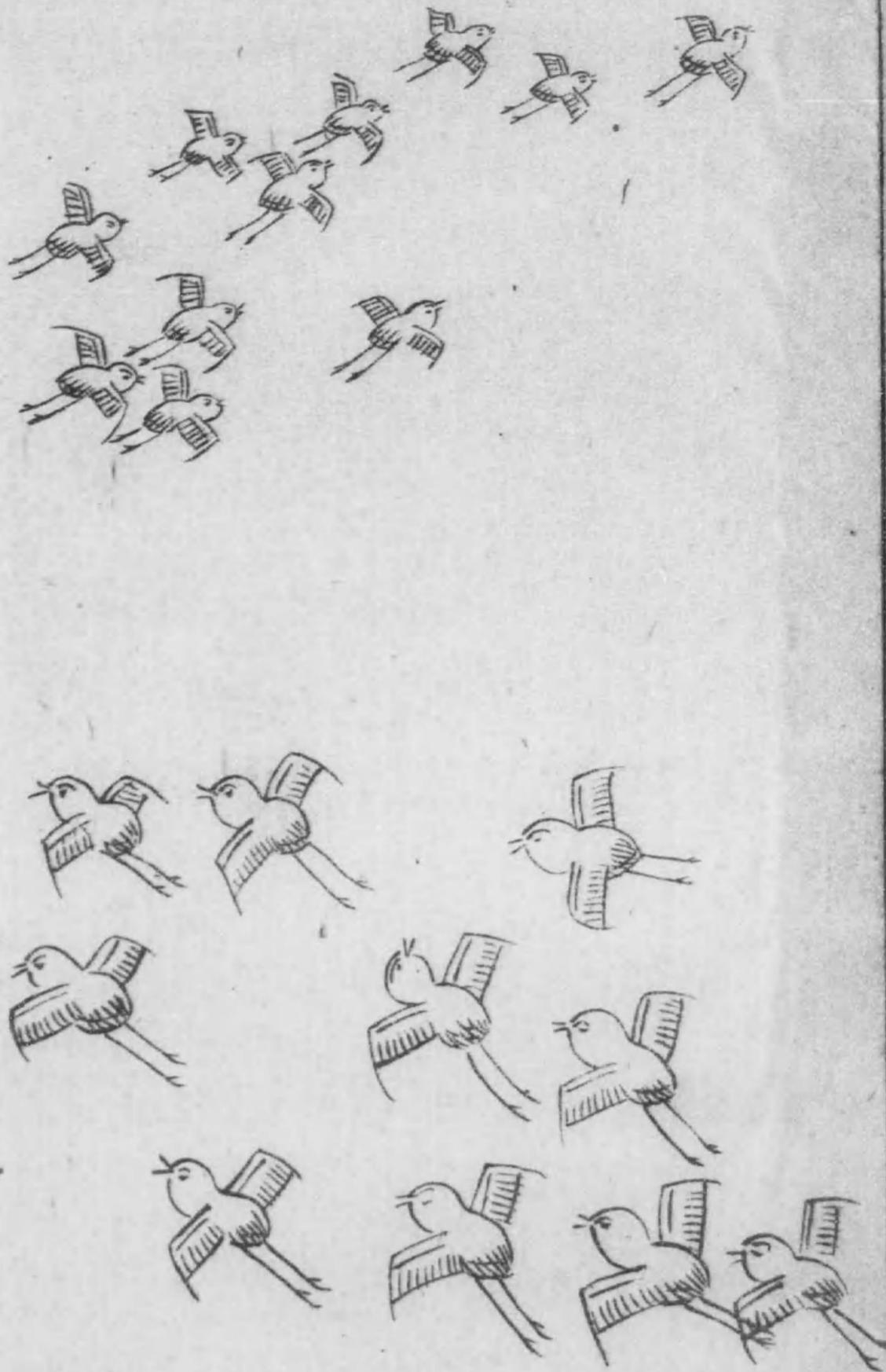
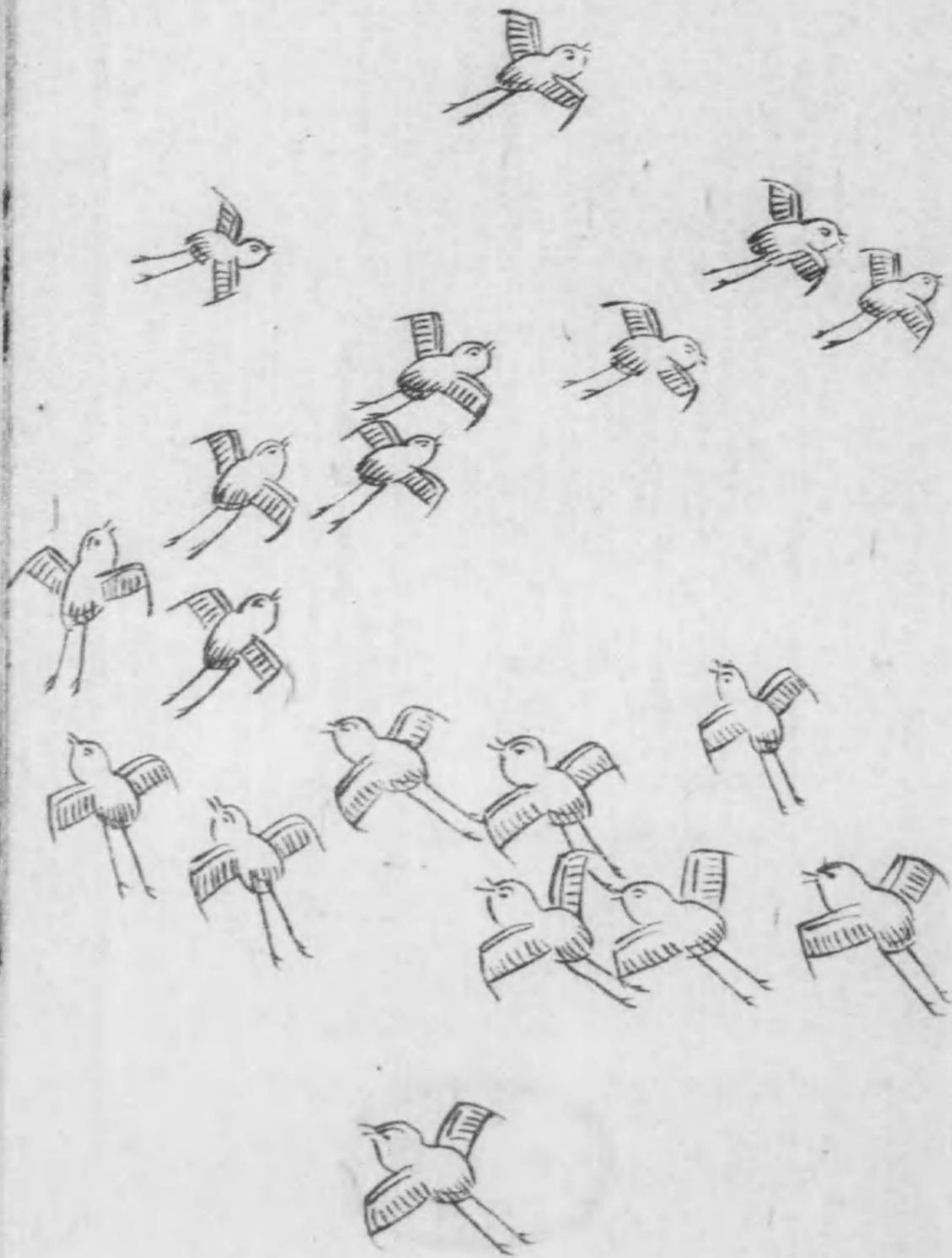
拍崎

阿漕

觀世流改訂謄本

丙六







觀之
世之



には及はず。辨才天が あらた 雲霞あり 天女と現じ 源平威儀記に「紫磨の法を隠して和光の道
 既に女人なりよとの意 天女と現じ に出で給。假に瑞蔵の女身を控てしとあり。又
 竹生島縁起に辨才天女示現等の 悲願 衆生を救はんとする大慈悲心に基き紫磨。茲にて 心覺
 識とあれはいつらたるとん 此語無し。惟ふに仮 衆生を利 紫磨島 かほとまで疑ひとあ
 佛の ちつうあう 名の誤傳たるべし。利生 蓋す事。紫磨島 疑ひといふと紫磨島
 に言ひ 五ち歸り 彼のまつと前 日月光り 云 日光月光並びに山の端を出づる如 かへす
 掛く。五ち歸り 五ち帰るに 海中に在りて雨水を司る神。人間 まれ人 を指す。本
 も 袂を返す 夜遊 軟舞。龍神 界に住めりにより「下界の」といふ 有縁の衆生 縁あり人 例へ
 より 云 佛は本より衆生を濟度す さまま 濟度の方が 多様なる意 有縁の衆生 縁あり人 例へ
 者の 天地に云 龍神が奇特を承 龍宮 龍王の住 む宮殿。

脇能

竹生島

三月

ツレ 辨才天(前ハ女)
シテ 龍神(前ハ漁翁)
ワキ 官人

早次第上

ツヨク

竹よ生るゝ鶯の竹よ生るゝ鶯の竹
 生島詣急せん 抑といひ延喜の聖

代よはへ奉る。臣下あり。諸も江州竹生

島の明神ハ。靈神よて。此座の向。此度

君よ。所暇を申し。唯今竹生島よ。系

詣仕の 道の行上 四の宮や。河原の宮。居末

竹生島

はやね。に。原。の。高。居。来。は。や。ね。も。き。井
の。水。の。目。見。ら。ぬ。は。代。の。逢。坂。の。開。の
宮。居。を。伏。一。揮。又。上。越。し。は。志。賀。の。里。
鳴。の。浦。も。著。か。り。つ。鳴。の。浦。も
著。か。り。つ。程。の。鳴。の。浦。も
暫。ら。く。相。待。ち。便。船。を。さ。か。い。や。な。る。

シテサシ上
お。も。ろ。や。頃。ハ。糸。生。の。半。あ。い。が。浪。も
う。ら。よ。海。の。面。霞。み。渡。れ。朝。ほ
ら。け。長。閑。の。浦。の。舟。の。道。ら。ま
あ。か。と。あ。か。い。か。あ。い。か。浦。里。よ
ほ。み。馴。れ。て。明。暮。軍。よ。う。ら。つ。の。敷。を
つ。て。身。ひ。と。つ。を。助。け。や。せ。ん。と。伝
く。の。ひ。ま。も。浪。向。よ。明。け。暮。れ。て。せ。を

ツトカレ上

お舟を氣らせん 早嬉しやたてハ

迎の舟法のかと覺えたり 舟

殊更長閑し 風もあ

名こそさるあみや志賀の浦におま

ある都へ痛きやお舟はなれて

浦を眺め給くや 所海の上所

海の上國は近江の江よはれた 出この春

● 獨吟

あれや花はあから白雪の降る残

り時知らぬ山都の富士あれや猶

さえあくる春の日よ比良のおおる

吹くとも中漕ぐ舟よの盡きた

旅のあらびの思はなむ 舟のよそよ

見へ人もあ舟あれ衣浦を隔

て行く程は竹生島も見えたりや

竹生島

四

^{シテ}緑樹影^{シテ}沈んで^地魚^水は登る^色氣色
 あり。月^海上^浮ちんで^鬼も浪^を奔^ル
 る。面白^の島の^けや。船^著著
 して^喜あつて^喜や頓^て
 神前^へ参^つて^いく。出^陣陣^馬首^を引^く
 申^す。辯^才才^人の^名を^いふ。
 して^いく。新^念念^をい^ふ。及^び

た。勝^つて^あつた。不^思思
 議^や。此^島の^女人^を禁^制する^に及^び
 して^いく。申^す。事^をい^ふ。茶^をい^ふ
 此^島の^久成^如来^の名^を再^説する^に及^び
 女^人の^名を^いふ。の^うそ^いま^でも
 あつた。辯^才才^人の^名を^いふ。及^び
 辯^才才^人の^名を^いふ。及^び

千五馬

打切 辯

才女ハ女體も其神徳もあらたある。
天女と現れおまへませら女入を隔
あ唯知らぬ人の言葉あり
悲願を起して心嘗て年ひかへ
つらあらのさくより利は便に急ら
げよくあほど疑も 薙磯島の松
蔭を便よよまをるあまふ舟われ人

出ツヨク上
(論掛) 山殿頻に鳴動して日月光り輝きて
山の端出づるこゝろを現れ給ふかた
向よあらまをて社壇の扉を押し
開き山殿に入らせ給ひければ狗も
水中よのうかともみら白波のまをり
われ此らみのあるぞとさひ捨て
また浪よ入らせ給ひけり
末序中入

竹生島

凡^ニ多^ク行^キ事^ヲ 後^ツ上^ニ 抑^レ此^ノ島^ノを^シて
 神^ヲを^シ敬^ムハ^ニ國^ヲを^シ守^ル 辯^才又^ハ我^ノ事^ヲ
 あり^ニ其^ノ時^ニ 虚^ニ宮^ニは^ニ音^ノ樂^ヲ聞^クえ^ル 其^ノ時^ニ
 虚^ニ宮^ニは^ニ音^ノ樂^ヲ聞^クえ^ル 其^ノ時^ニ
 後^ノの^ノ月^ノは^ニ輝^ク 少^シ女^ノの^ノ袂^ノを^シも^シも^も
 おも^シら^ハや^ハ 天^ノ女^ノ舞^ヲ 後^ノ遊^ノの^ノ舞^ノ樂^ヲも^も時^ニ過^ス
 きて^ハ 後^ノ遊^ノの^ノ舞^ノ樂^ヲも^も時^ニ過^ス 月^ノを^シて^ハ

地拍子
 龍神の視
 獨吟

仕舞

渡^ル湖^ノつ^ラら^ニよ^シ浪^ノ風^ノ頻^ニ鳴^ク動^シて^ハ
 下^ノ界^ノの^ノ龍^ノ神^ノ現^レたり^ニ 龍^ノ神^ノ湖^ノよ^シ
 出^テ現^レて^ハ 龍^ノ神^ノ湖^ノよ^シは^ニ出^テ現^レて^ハ 光^も
 輝^ク 金^ノ銀^ノ珠^ノ玉^ヲを^シ彼^ノの^ノま^ニ以^テ人^ノを^シ捧^グる^ニ
 け^レき^ニあ^リた^カり^ける^ニ 奇^ノ特^ノあ^リあ^リ
 本^ノより^シ衆^ノ生^ノ濟^ノ度^ノの^ノ誓^ヲ 本^ノより^シ衆^ノ生^ノ
 濟^ノ度^ノの^ノ誓^ヲ 本^ノより^シ衆^ノ生^ノ

等は別勝にあらず。吾今三點云。観音撰法中の三教今の偽文。我今已具揚技津水唯願大恩表揚
 同一勝たうとの意。授受。我今再献揚技津水唯願觀音表揚授受。我今三點揚技
 津水唯願薩埵表揚授受の第三句を引く。観音の前にて行者が左手に水を入れたら津器を掛け右手に
 揚柳の枝を持ちて此文を唱へ三回水を灌ぎて供養す。以て観音の加護を祈らうなり。三點とは三回の意。
 菅洞家にては此文を宋音にて讀む故に茲にも其れに倣ひて宋音。玉文の瑞観。吾今三點の文を讀む
 を用ふ。但し三點はサンテンにあらずサンチヤンと讀むなり。念の殊。念珠。即ち數珠。
 朝に紅顔云。和漢朗詠集に「朝有紅顏誇」。弓馬の騷。戦。嫡子息源太。義朝の長男十五
 を殺したるが爲世人呼んで息源太といふ。平治の石山寺。石山村にあり。兵衛佐。頼朝。義朝。政
 乱後、捕へられて、條河原に斬らる。時に年二十。長田。名は忠茂、鎌田。やみやみと云。義朝
 彌平兵衛。上治の途、頼朝を擒にして京都に送る。母。我生々に是に逢て生を受けざることを無しとあらに據る。一乘
 田に謀られて湯殿。一切の男子云。梵網經に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が
 母、我生々に是に逢て生を受けざることを無しとあらに據る。一乘
 の功力。妙法の。瞋恚の甲冑。佛教にては怒りは他を害するものなれば三毒の一とす。棒弓。
 「ととの。玉きはる。命の枕詞なれば茲。修羅道。六道の一、常に闘戰。敵に合竹の。敵に逢
 枕詞。玉きはる。にては「魂」に冠す。修羅道。六道の一、常に闘戰。敵に合竹の。敵に逢
 竹に掛く。合竹は吾樂の詞、笙の管を數本同時に吹き合す。白雲紅葉。源氏の白旗、平
 こと。竹の節と節との間を「よ」といば次の此「世」の序とす。白雲紅葉。源氏の白旗、平
 かに保く。難儀の手。修羅道に速近。修羅道に「落つら」を速近に。

二番目

朝長

正月
 前前前
 シシシ
 テテテ
 キキキ
 レレレ
 從從從
 者者者
 女女女
 者者者
 (素談ナシ)
 後シテ 朝長之宣

早付
 この山嶮城清涼寺より出てたる僧
 よそのさても此度平治の乱よ義朝
 都や所聞きの中よも丈夫の進朝長の
 美濃の國青墓の宿よて自害一はて
 給ひたる由承りい。われらも朝長の序
 縁の者よその程よ。急ぎおの處より。

^{ワキ道行上} 伊跡をゆり申かへり思ひまはして
^{ヨウク} 近江路や。瀬田の長橋より渡り。瀬田
 の長橋より渡り。猶行く末に鏡山老女蘇
 の森を打ち過ぎて。末は伊吹の山風の
 不破の閑路を過ぎ行き青墓の宿よ
 著きよけり青墓の宿よけり
^{ツレ改第上} 花の跡よ松風や。花の跡よ松風や。

雪よも恨みあらん 此の青墓
 の長者よその草の露水の泡
 はあまのたぐひも哀をさる
 習あるよ。此の殊更思ひまはる人の
 歎や身のくへよ。あはる涙の雨とのみ。
 茶室の袖の花薄穂よ出まへ言の
 葉も。あはれありある有様か。光の

●小言
 陰を惜めども。月日の數ハ程ありて
 雪のうらみ。春のまよひ。つらきもの
 春のまよひ。つらきもの。凍れる涙
 今ハはや。つらきもの。寝たて。夢よたな
 持面影の見えども。痛き。あり
 有様を思ひ。つらきもの。思ひ。出
 出づる。つらきもの。つらきもの。つらきもの

●小言
 序墓所へ。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 兼つ。序跡甲ふ者も。つらきもの。旅入と見
 え。つらきもの。つらきもの。つらきもの。つらきもの

●小言
 序跡甲ふ者も。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲ふ者も。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲ふ者も。つらきもの。つらきもの。つらきもの
 序跡甲ふ者も。つらきもの。つらきもの。つらきもの

地拍子
見の目也

つぎて。歎かせ給ふ所有様。おその見
 目も哀さをしらさるん。悲しき
 かなや。形を求むれば。苔底が打骨見
 ゆるもの。今更は無。さて其聲を
 尋ぬれば。草徑ぐら。骨とあつて。答
 めるもの。更におあ。三世十方の佛。院
 の。聖身も憐れむ。あつて。魂幽

更のり
打切ニモ
(打切ニ習アリ)

市僧の中い
上

三十四

雲のなみし。嬉しと思へば。打切かきて
 夕陽影らる。かきて夕陽影らる。
 雲絶え絶え。行く雲の。青野原の
 露分けて。彼の旅人を伴ひ。青墓の
 宿よ。帰りけり。青墓の宿よ。帰りけり
 市僧よ。申の目。苦しく。暫らく
 こころ。市僧。留めて。朝長の所。あそ

世音。三世利益同一體。眞あるあま。
 誠あるあま。頼も一や聞けら妙ある。
 法のは聲。吾今三點。揚枝。
 津水唯願落埵と。心上。心耳をまま。
 せらま文の瑞調。感應。肝子銘まら。
 ちりあら。あらならもの吊ひやあ。
 不思議やも観音懺法聲まをて。
 早かん上。

燈火の影。幽あるま。ぼく又れま。
 朝長の影のま。くも見え給よ。若く
 若く夢より幻。本よりも夢。幻の
 假のせあり。其疑を止め給ひて。尚
 法を講し給へ。げま。かやま。
 まみえ給よ。偏よ法のかぞと念の珠。
 の敷くりて。聲をかよたよりくま。

早ハヤ真マコトの染シメるル 幻マヤカシと目メくらク 隠カクレらル
 早ハヤ面オモテ影カゲのノ 地チ上ウヘ敷シ あハいハらハまマのノ 形カタやヤ
 消キヲえスまマのノ 形カタやヤ 消キヲえスまマのノ 消キヲ
 えスまマのノ 燈トウ火カをヲ 情ナリくクまマのノ 朝アサ長ナガをヲ
 共ニにニ 憐アハレみミてテ 深コ夜ノのノ 月ツキもモ 影カゲ深コひヒてテ 光ヒカリ
 陰カゲをヲ 惜オソみミ給タマへヘ やヤ 時トキ入イちチまマたタぬヌ
 浮ウ世セのノ 習ナリありリ。 唯タ何ニ事コトもモ 捨スてテ。

法ホウをヲ 説セツくク せセ 給タマへヘ やヤ 法ホウをヲ 説セツくク せセ 給タマ
 へヘ やヤ 所トコロにニ ありリ たタまマ 紅ベニ顔ガハあハつツてテ。
 世セ路ヂよヨ ほホいイとトしシとトもモ 外ソトへヘ 白シロ
 骨ハネとトあハつツてテ 郊キョウ原ゲンよヨ 朽クちチぬヌ 昔ムカシにニ
 源ゲン平ヘイ左サ右ウエのノ 朝アサ家カをヲ 守モリ護ゴへヘ 奉ホウりリ
 地チ代ダイをヲ 治チめメ 國クニ家カをヲ 鎮チンめメてテ 萬マン機キのノ
 父チチをヲ 保ホへヘ 平ヘイ治チのノ 世セのノ 乱ラン

い。あ。る。時。ら。来。り。け。ん。思。ひ。な。ら。う。
 み。ら。馬。の。騷。備。よ。時。節。到。来。
 あり。程。の。嫡。子。無。頼。が。義。平。の。
 石。山。寺。の。籠。り。を。多。勢。の。無。勢。備。
 せ。ね。ば。力。あ。く。し。け。ら。れ。て。終。に。誅。せ。
 ら。れ。よ。け。り。三。男。兵。衛。の。佐。を。六。弥。平。
 兵。衛。が。手。に。獲。り。こ。れ。も。都。入。り。と。ら。れ。

横む本

拾ひぬ
能ニテハ打切ニモ

ける。父。義。朝。の。こ。れ。も。野。向。の。内。海。
 二。落。ち。行。き。長。田。を。頼。み。給。へ。も。頼。む。
 本。の。も。と。よ。雨。漏。り。を。や。み。く。と。討。た。れ。
 拾。ひ。ぬ。い。ち。も。あ。ら。ざ。長。田。の。こ。い。ひ。あ。く。
 て。主。君。を。討。ち。奉。り。ぞ。や。い。ち。も。あ。ら。ざ。
 此。宿。の。あ。る。一。の。志。も。女。人。の。あ。ひ。く。
 し。く。も。頼。ま。り。て。一。夜。の。情。の。み。ち。あ。や。う。

子踏まがへも。かきみむらびり。ちかき。の。うら。ま。ら。し。き。
 抑ミりのせの契ミそや。地チ切キの男子ヲ
 ちばま。この父と頼タみ。萬マンの女メ入イとま。ま。ご。
 の母ハハと思トモへ。今イマ身ミのよヨき。まマら。れ。
 たり。ちかみ。ら。親オヤ子のコのノいイひヒこコのノゆユりリ歎ナゲ
 あり。が。平ヘイひヒも。真マコトのノ集ツクむム志シ請コトけケ悦エびビ
 申マウまマあり。朝アサ長ナガらラ後ノチ生ナまマるルも。中ナカ心ココロ安ヤスくク
地拍子
請け
トモ

おほ。め。せ。ら。び。頼タむムか。し。か。し。ま。の。
 功イサがガあアらラいイよヨあアいイかカしシがガ未ミだダ願ネガふフの。
 甲カウ由ユ胃イのノ所トコロ有アりリ様サマぞゾ痛イタむム。まマ
 本ホノのノ身ミあアらラたタまマあアらラたタまマ。魂タマハハ善ヨシ所トコロにニ
 赴イけケどドも。魄ハタラシハハ修シユ羅ラ道ダウにニ残ノコりリてテ暫シブ
 一ヒト苦クみミをヲ受ウケくク。あアりリ。地チ上ジヤウにニもモくク修シユ
 羅ラのノ苦ク運ウンはハあアらラいイ。あアらラいイ。魔マよヨあアらラいイ。竹タケの。
 明長
三

地拍子
ニニニニニニ
トモ

此せまてみー有様の地源平兩家
のりかゝ地上旗ハ白雲紅葉の散り
まどり戦ふ軍の極めの悲一さん
大胸を朝長が膝の口をのぶあふ
射させて馬の太腹よ射つけらるゝだ
馬の頻ふ跳ねあふれだ鐘をこして
おんだんときいども難儀の手あれば

地拍子
ニニニニニニ
トモ

一里のあきかたを乗替よあふ
のからしてあふれ江路を志のあふ来
て此青墓よりかり雑兵の手よ
懸らんよりかと思ひ定めて腹一文
字よあき切つて其まよ修羅道よ
遠近の土とありぬる青野が原の
あふ跡よびてなび給あふ跡をいひ

月天

てたび終へ

朝

十

姨捨

解題

都の者、中秋月明の夜姨捨山に別りたり。昔此山に捨てられたる老女の亡霊現れしことと
作れり。古名を姨捨山と云ふ。又、姨捨、伯母棄、伯母捨等の文字をも當つ。後世、世
阿彌の作と傳ふれども世阿彌の中樂談儀に曲名を記さず。姨捨の事蹟は古今集雜の上に載り
讀人知らずの歌「おが心慰めわねつ更級やをばすて山に照る月を見てにまじたりものにて、後、大和物
法に此歌に附會して一條の歌謡を記せしが此話の初見なり。其歌法には「信濃の國更級といふ所に住み
し男、稚き時親に別れ、伯母を親の如くかへつきて若き頃より共に暮し居たりしが、其處此伯母をうる
さしと思ひ、伯母の老いゆくに怪いて思ふこと甚しく終に夫に迫り伯母を捨てよと云ひて聞かず。男
も其心にならず、月明たる一夜、寺に行くと偽り、伯母を肩負ひて高き山に行き、そこに捨て、帰りしが
さすがに多年の恩愛の情惜し難く、一夜眠りもつかず、折から其山の上より明をる月のさし入るを見
て、悲しきの餘り、彼のおが心慰めかねつ云との歌を詠じ、夜の明ると共に再び迎へ来りて昔の如くか
づきたり。それよりして此山を姨捨山といふ(意を取ら)とあり。次いで後撰無名抄には同じ説話を載せ
歌を老女が山に捨てられて悲しきの餘りに詠みしものとし、再び家に迎へ取られたる事は記さず。此二
書の歌法はわがて四碑となりて様々に傳はり、後世姨捨山を歌に詠まれ文に作らるる事多く、強曲にと
亦取り入れられしものなり。されども最初の古今集の時に、既に作者も作の原因も不明なりしものな
れば、それより遂に後世なる二書の歌法は「をばすて山」の詞に由りて附會したるものと見らる。歌物法
には此種の作物語多きものなり。

辭解

月の名

「秋」に「明」をかけ、名高き明月の時の
「近き」意にて「秋」の語に接けたり。

姨捨山

信濃國更級郡に在り。されど
其所在に詳きとは難説あり。

今も同郡八幡村の西に姨捨の地名あれど之は後人の傳説に假託せしものなり。四季の月など、稱するは
遠に後世のことなり。此曲の曲據とも見るべき後撰無名抄には更級山即ち冠山を稱したるものとすれ
ども今の小谷御燈崎村なる長谷青山の異名小長谷(ちほつせ)山の轉訛なりといふ説を採るべきか。月の
名勝として多く歌に詠まれたれども、皆古今集の歌、大和物語、無名抄等の話柄を因として想像して詠
じたるもの。更級の月 姨捨山の 旅居 字を「旅あ」に傳へ誤りしものなり。假枕 假すめに
のみなり。

中宿

途中の、さこそと

大和物語の故事をさこ
そと思ひやれりたり。

面白からんずらん

面白からん
であらう。在所 姨を捨
てし其

姨捨

所。心えぬ

老女は「我が心」云々の歌にて問はれんを想像し居たり。心を得たるは「心を得たる」といひたるなり。之を「心を得たる」の意に解くは却つて心得

心事。我が心

古今集に「人知らず」として出でたるが初見なり。小長谷山に照る月を見ては我が心

なり。記あり

後撰無名抄には「桂」特に桂を挿むは月に因

られし伯母の縁めしとせり

桂 みるも木なればたるよし。埋れ草 跡が埋没し去りたる

を、草を連綴とし、其縁語「刈り」の

執心 執着す。秋の心 風までと身にしみごとく秋

音を借りて「假なり」とせり

はやくづく 「秋の葉に音を垂れてはやしと一重山 通科郎屋代歌の

残り

ふとの境あれど如何はし。此句又大教撰々にも出づ。一重山といふ語は萬葉集に詠まれ外此と

見當らず。然も萬葉集に在りては唯一隔の山といふ意に非ず。こゝも此意なり。之に

紅葉の度の一重にて来た濃厚。薄雲 一重といふより薄 雲つき 雲の無く 夜遊 夜、秋ひ

なかりさる意を命めたるなり。薄雲

名に「おひたる 山の名となす。それと 映すむ 月に對し 夕陰 夕暮の

りたる物陰。言ふに掛く。又待詠に「夕陰」

いつくの秋も 何所に來りても秋に隔 三五

と強ひ出すし前の語を受けたるなり

夜中 三五夜、新月は新に出でたる月、故人は友人、月を見て二千里外の友人を憶ふとなり。

明けは又

新勅撰集に出でたる室家の歌。第四句「傾く月の」とあるを「今宵の月の」とかへて

らす。秋も事の過ぐ

名を望月 類無しといふ名を持つを 見しだ

らるが惜しとせり。さなきだに

にも云 此程限無きは曾て見しやうに 堪へぬ 月の好きに心遣 昔とだに云 昔捨てられ

は思はず、清光今更の

白衣の女人 月宮に白衣の天女ありといふ傳 おぼつかな 確たるささ

如く新に覺ゆとの意。

昔に帰る 昔を追憶して現 月の友人 月を眺む まどろ 一塵に居 花に起き臥す云

花の辺に起き臥して袖に

色々々 露の色々々なるを 一つ馴れそめて云 一つの向に親しくなると

衣の邊に起き臥して袖に

盛りふけたる云 花の盛りは疾く過ぎたる女郎花 草衣 前の女郎花を しまたれて 涙に

のしめくしと濡しを草衣

面を更級 顔を人にさ よいや 氣を取り直し、夢の世と親じ

の草の縁語を草衣に掛く。

思ひ草 女郎花、蕙草、龍膽等の異名をなすといへど古未嘗をらす。興にひかれて云 昔の王

いふ人、月清く雲白き一夜、小舟に乗じ戴安通といへる友を訪はんとて其門に到りしと終に逢はずし

て帰りしかば、人其故を問へば「兼與而來、兼與而反、何必見安道耶」と答へし故事あり。月夜の縁に

てこゝに 一輪満てる云 竟山堂外記に出でたる一僧の詩句に「此夜一輪満、清

引く。一輪満てる云 光何處無」とあるを引く。一輪は月、清光は月の光。團々 月のまどろか海

嶠 海邊の

諸佛の御指を引 三世十方の諸佛が衆生を濟度し 起世の悲願 阿弥陀佛の誓願を

高き山

誓の偈の中に「我建起世願」の句有り。他 昔き影 影の物を蘇ふが如く普遍な 彌陀光明に云

の諸佛に起え願れたら本願たればなり。

三光 白虎通に「天有三光日月星」西に

阿弥陀經に「彼佛光明無量照十方國、無所障蔽、是故

行く云 三光の西へと傾き行くは、衆生をして西方 如來の右の脇士 阿弥陀如來を本尊とし、観音

行く云 三光の西へと傾き行くは、衆生をして西方

有縁を云 有縁の衆生にて、佛と何等かの

依する故に服士といふ。觀經に「想一大勢至菩薩像坐

重き罪 五逆、十惡 等の罪科。天上の力 觀經に「令離三塗得無上力」とあり。もと無上とありし

得見。重き罪

大勢至 前掲經文の次に「是故稱此菩薩名大勢至」と見ゆ。月を勢至菩薩とすは

ものな

らんか。大勢至 羽衣に「南無希命月天子本地大勢至」とあり。天地本起經に「阿弥陀佛道應声

吉祥ニ菩薩一馬日月、應是觀音、天冠の間に云、觀經に「此菩薩天冠、有五百寶華、一々寶華、吉祥是勢至」とあるに據る。玉の臺は、廣長之相、皆於中現しとあるに據る。玉珠樓、珠玉の如く美しき樓閣。系竹、系は姓竹、廉しき臺、他方の淨土は西方以外の淨土。系竹、は管、風の音が自ら系竹の心引かる。取て引といふ。蓮、ハチスしたる心を「ハチ」と云、寶の池、湖をなすの意。淨土に八つの池ありて七寶より成り。たつや並本、並つ波と掛く、並本は七重行樹とて、七寶の樹水中に蓮華咲くといふ佛説に據る。麁へて、麁いてといふ。おのづから、鳥の尾、無芬芳、麁り。迦陵頻伽、音の絶美を以つて。類へて、ふ徑の意。雲月、雲間の月、然れども、邊光、大勢至菩薩の異名。觀經に「但見此菩薩大毛孔光即見」。雲月、以下月の空に寄せて、感象の理。有為轉變、諸現象は無常にして、露の間に、草の縁法を借りて、たふかくて。胡蝶の遊び、云、高麗樂に胡蝶の舞といふ曲あり、胡蝶の花に戲る、状を摸して作る。此意にて、返せや、袖を返す事に昔の願、亡女執の心、迷妄して執、閻浮世、あさま、朝になつといふ、掛く、我れも見えず、秋姿の幻影が人の目より見えすたさる事。月、昔こそあらぬ、昔、掛てられて世に映捨山と云はれたらうか、念も、又旅人に捨てられて新に映捨山と云ふけりよと云ふ。

重習
三 春目

映捨

八月

ワシテ 老女ノ慮(前ハ里女)
ワキテ 旅 僧(又ハ男)

見せし程よ

早次第上

ヨワラ

月の名ちあき秋あけや月の名ちあき
 秋あけや映捨山を尋ねん 尋ねるよ
 者ハ都方よ信まひはる者よとのわれ
 未だ更級の月を過ぎの程よ此秋思ひ
 たも映捨山へと急ぎの 此程の暫
 旅居の假枕暫一旅居の假枕又ま

道行上

打切

まぢりまぢり今昔の日の田舎のこゝろ
諸の更級の入るにせしむるに
まへ姨捨の在所にけしむる程の
姨捨止のまぢり跡の同様の給ふに
我が心慰めあむり更級や姨捨止
照の月を照らすにけしむるに
まぢりまぢり今昔の日の田舎のこゝろ

姨捨のまぢり跡の同様の給ふに
此本の蔭のまぢり跡の同様の給ふに
の跡のまぢり跡の同様の給ふに
せとて今昔のまぢり跡の同様の給ふに
人の猶執心や遺つてまぢり跡の同様の給ふに
も何とやらん物凄くまぢり跡の同様の給ふに
風も身よまぢり跡の同様の給ふに

姨捨

慰めおねり更級の者。慰めおねり更級の者。
懐捨山の夕暮よ。松も桂もまの木の。
緑も残りて秋の葉のはや色し。お
一重山薄霧のさくら霞の風。薄く野
つたて。叙一か。にの。氣色し。お。お。お。
上の氣色し。お。お。お。お。お。お。お。お。
事り終よぞ。お。お。お。お。お。お。お。お。

都の者よ。更級の目を承り及び。
始めて此處よ。来つて。よ。備へ都の
人よ。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
目と共よ。現の。旅人の。夜露を。慰
め申さ。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
所身は。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。
更級の者。お。お。お。お。お。お。お。お。お。お。

ちうからや。明あらびの秋のあらまも。
きぬべ。今宵の月の借かの女を。
ちうかだよ秋待ちあねて類たのなを。
望月の見みだまも。昔このあらまよ。
隈かの娘捨す止との秋の月つきあらまよ。
堪かぬまも。昔このあらまよ。思おもひの夜よ。
不思ふ議ぎのあらまよ。思おもひの夜よ。
早はやから上

白衣の女を入い理りの給たまひ。昔このあらまよ。思おもひの夜よ。
つつああ。昔このあらまよ。思おもひの夜よ。
きき。昔このあらまよ。思おもひの夜よ。
何なにをあらまよ。思おもひの夜よ。
捨すのあらまよ。思おもひの夜よ。
帰かるあらまよ。思おもひの夜よ。
草くさをあらまよ。思おもひの夜よ。
早はや

え、
 ちみ色この夜露のへより野れそ
 めくろくあや 地上果 盛みけたる女郎
 花の盛みけたる女郎花の草衣志ほ
 たりて昔たよ捨てられ一程の身を知
 らぬ又姨捨の山よ出て面を更級の
 目よ見ひらき果あや 美 や何事も
 夢の中にあつて た 思 た

思草花よめで月よそめて遊さん
 げ 打掛 や興よひらきて来り興つきて帰
 しも今のちりちと知られたる今宵の
 空の氣色あや シテ 然るよ月の名所
 ちりちあや 地 更級や姨捨山の曇
 ちりち一輪満てる清光の影團 シテ として
 海崎を離る シテ 然るや諸佛の法誓

地
 べり勝方あひらきとて世の悲願
 あまねき影慈院光明よまじらあ
 程よ。西より行く。衆生を
 して西方よ。勧めのれんが為とも月
 彼の如來の右の脇士として有縁を
 殊よ道す。重なる罪を軽くす。其の
 力を得る故よ。大勢至の号をいふ。

●福々

天冠の向よ。そのまある。其の喜の
 かぎくよ。他方の淨土を現すと珠
 樓の風の音系竹の調よりくよ。心
 かる。方もあり。蓮色よ。咲かま。る。
 寶の池のほとりよ。たつや並木の
 花散りて。芬芳き。あつよ。乱れたり
 迦陵頻伽のたぐひあ。聲を

映舎

たぐへてもろともは。孔雀鸚鵡の。
同く轉る鳥のおのづから。光も影も
おあめで。至らぬ隈もあひのけ。無邊
光とも名づけたり。然れども雲月の
ある時。影満ち。又或時。影缺くる。
有為轉變の世の中の。空のあまを
示まあり。昔戀も夜遊のそで

ワカ上

序之舞

地上

打上頭三付

シテ中

我がころろ。慰めあわづ。からあや
懐捨山。照る月を見て。照る月を見て
月よ。馴れ花は。戯る。秋草の露の
向よ。露の向よ。あづく。何よ。現
れて。胡蝶のあそび。戯る。舞の袖
返せ。返せ。昔の秋を。思ひ出で
たる。妄執の心。や。方もある。今宵の

夷舎

七

秋風身よ志みくぐと。恋も昔。
 志のさしきる。圖浮の秋よ友よ思ひ。
 居れば夜も既よ志らくとはばやあまま。
 ともありぬれだ。あれも見えきて旅人も。
 帰るあまよ。ひさしり捨てられて老。
 昔こそあらぬ今も又姨捨山。
 ともありよける。姨捨山ともありよけり。

柏崎

解題

謡ひ方梗概

柏崎殿の妻、夫の死し、愛見の過せ、更に、狂氣して、善光寺に迷ひ行きしが、其如來堂
 に通を愛見に遊遊したる事を作ら。狂乱もの、中にても、病後作とも。中樂後儀
 に「うかひ拍子」をば、あるを、(接並)の左衛門五郎作也。さうながら何れも思き、よき
 ことを入れれば、皆女子の作感べし。拍子には土車、能の曲舞をいれらるゝと見ゆ。栗田の初進申樂所演
 前は表傷、後は眞の狂女にして、心持、復急変化多け。シテ 前後はおく、悲痛
 には、能く文味を會得して、謡は、さうからず。出の「たに小左郎とは」云々は、調子餘り高かぬやう靜に謡ふ。以下ワキとの問答の中、何
 と、若か「は確りと出、」たを、進子をば」と前へかけて、扱ふが宜し。此程は「より」クドキの調子にて、温やかに
 謡ひ、氣は、かゝれと、運ひは、つけず。ロンキは、前下に取れて、寂しからず。こげにや、敷き、と云々は、形見を見
 る心に、情熱とあふ、さても、以下文は、ロンキより、斯か引きて、さうりめに、謡ふ、うち、つと
 りとしたる、味は、ひ有る。後は、狂亂して、郷里を、出づ、との、たれば、前と、全然、其扱ひ、心持を、異にす。こ
 れた、あら、ん、ど、とは、云々は、氣をかけて、確りと出、句毎に、多少の、復急を、持ちて、子の、行く、へ、をも、白糸の
 と、一聲の、調子にて、扱けぬやうに、謡ふべし。サシは、氣を、受て、さうりと、謡ふ。ワキとの、問答の中、「教へは、も
 と、より」以下、柔か、りて、綴を、は、す、み、行き、さ、た、こ、そ、と、氣を、乗せ、て、確りと、強ひ、地へ、渡す。いかに、中へ、は、
 少く、投まの、實めたる、心に、情熱に、謡ひ、出し、「あ、らい、と、ほ、り、や、し、り、再び、狂は、り、き、心に、調子を、新か、上
 にとり、か、り、り、めに、謡ふ、が、宜し。九品、蓮華、の、は、少く、確りと、次の、サン、以下、は、や、靜に、ある、と、し。クセの、初
 の、上端、は、確りと、強ひ、後、たる、は、さうりと、扱ふ、ロンキ、は、親子、ワキ 素、被、男、物、を、は、重、く、れ、ぬ、や、う、ハ、キ、
 再會の、喜、か、れ、は、調子、晴、れ、か、に、喜に、満ち、て、強ひ、が、宜し。ワキ と、あ、く、し。次第、以下、凡て、此、心、にて、強
 ふ。シテ、との、問答、は、慎し、やかな、さ、く、ロンキ、は、清、短の、形見を、渡す、處に、疑する、心持、地 「昔、後、りに、」云々
 によ、シテ、より、も、運ひ、て、承、け、渡す、ワキ、ツレ、は、輕、難に、な、り、ぬ、を、程、に、輕く、扱ふ、地 「昔、後、りに、」云々
 りと、強ふ。「さ、から、ん、父、か、」云々、も、靜に、「父、が、別、れ、は、」以下、さ、り、て、低、め、ず、さ、ら、り、と、強ひ、て、好、く、復急に、心、
 シテの、憂、き、心、中を、表、は、す、べし、後、は、シテの、強と、相、俣、ち、て、好、く、狂、女、物、の、趣、有、る、と、し。「亂、れ、心、や、狂、ら、ん、の、
 一句、柔、を、か、けて、さ、ら、り、と、受、く、」憂、き、身、は、は、や、と、靜、め、て、確りと、出、「後、の、圖、府」以下、す、ら、り、と、運ひ、て、
 調子、好、く、強ふ。「頼、も、一、や、」は、柔、ま、を、起、て、稍、高、く、「悲、陀、は、過、す、く、は、す、か、り、と、受、け、て、引、き、ま、て、強ふ。ク、リ
 は、高、め、に、さ、ら、り、と、扱ひ、サ、シ、は、シテの、調子、を、承、け、ク、セ、は、餘、り、位、を、靜、め、ず、斯、か、氣、を、乗、せ、て、強ひ、が、宜し。ロンキ
 以下、は、喜、を、旨、と、して、調子、好、く、さ、ら、り、と、強ひ、納、む、べし。圖、原、は、ソ、ノ、ワ、ラ、と、強ひ、す、ソ、ノ、ハ、ラ、と、強ふ。

注意すべき諸方

後段クワの後、異香満ち満ちての二節はナしく運びを定め兼ねて注ふ。他に例ナシ。

辭解

夢路と添ひて云、永き旅路に夢心地の目数を重ねて今故郷に帰るに夢路と添ひて云、永き旅路に夢心地の目数を重ねて今故郷に帰るに

雪の下 舞臺、舞臺、一通り降る云、道を通ると村の山の内、舞臺の山北明道、今は上坂

山の内、袖さこまざる、文筆に北國に近づくに降りて雪れ、油、雁木の峰、前の「さこまざる」を承け

地名の確本と通はせ、舞臺より、心もとたや、はしや、適世、舞臺の文を避けて、そなたの風云

早や信濃國に入らんと云す、舞臺の文を避けて、舞臺の文を避けて、そなたの風云

舞臺の方位より吹きくる風、いたはり、命つれなく、舞臺の文を避けて、そなたの風云

さへも像か、舞臺の文を避けて、舞臺の文を避けて、そなたの風云

らん父、善光寺、長野市に在り、皇極天皇、勅命によりて本田、いづとも知らず、何處

とし、如來堂、本尊の如來を安置せら殿堂、即ち本堂、善光寺の本尊は中央阿彌陀如來、左右觀音勢

なり支那、西向を經て飲明天皇の時、我國に渡來し、蘇我、これなる童、共は云、舞臺の文を避けて、そなたの風云

物部西氏の時、身を隠せ、歴史上著名なる佛像なり、これなる童、共は云、舞臺の文を避けて、そなたの風云

うたてやな、情無き、心あらん人、同情心ある人ならんは他人の不幸を、つま、夫をさし、行く

へをも云、行方を知らしぬを由來にかけ、糸の場にて乱れ心に候、あだ、積み難く送らるること

明な、思には死なれりけり、早く死なれりと思へども物思ひの爲に死なれりとは中々難しとなり、原故

とてながらふる、捕の茶、夏き身は何となくを捕の、國府、任若官術を置かけ、國々の中心部會

身をしと見ぬ、茶にかけ、次の拍を呼び起す、國府、國府又は府中ともいふ、此後の國府

は其田は不詳なれども、和名抄には「在頭城即」とあり、今の、いつまで草下、いつまで草下

中頭城即直江津の南方、國分寺の東方の地たること、いつまで草下、いつまで草下

までかかれずとふ、麻衣、親の扱ひを知らず居る子の心の「浅き」、常寂若の里云、常寂若は信濃

の北の地、今の常寂若村、本島は同じく飯山町の東、下高井に属する今の本島村、浅野は今水内

郡鳥居村、井上は上高井郡今の井上村、いづれも越後より善光寺に至る途中の地なり、桐の花

さく井の上、寶篋華の詩に「鳥鶴争飛、生身、意又は像なり、極重要人云、慧心僧都の任を要

人なら末世の衆生は成佛すべき他の方法を段なり、唯南無阿彌陀佛と称念、唯心の浄土云、自己の心中に

の名字を称ふることによりて依りてのみ極樂浄土に生ずることを得との意、九品上生の位、九品は極樂に

但し己心の弥陀唯心の浄土といふことは浄土門に設せざることなり、九品上生は九品の上品上生の意に、取

果報の階級なり、上中下の三品に各上中下の三品ありて九品とす、九品上生は九品の上品上生の意に、取

上等の位地なり、通用語として上品上生といふべきなり、九品上生といひたる例無きにあらず、源平威

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

白舟

に乗り来りて浄土に迎へ取らるをいふ。「蓮臺の花散りし」異香薫
 「白虹地に満つ」とは皆空を来迎の瑞相を形容したるなり。飛花落葉云々 人世の無常を説く。有
 化の性を有する物の。電光石火 人生の生死の極めて短時間たる
 常に移り変わりゆくをいふ。電光石火 比喩。碧巖緑に「磐石火閃電光」
 き身と續く。狭衣に「尋ぬべき草の原」 三界 佛教にて輪廻轉生する迷ひの世界を
 さへ指括れて誰に向はまし道之の露路 三種に大別し、欲界、色界、無色界となす。真如平等 眞如
 實知常の義、一切万有の實相を指す。此實 煩惱のきづな 心身を惑はし惱ます精神作用。之あるが爲に身
 体は絶対無差別なるが故に平等といふ。煩悩のきづな 心身を惑はし惱ます精神作用。之あるが爲に身
 はやがらをいふ。きづな 罪障の山高く 空觀に「罪障山高以力不能斬 煩惱海深以手
 とは繁きとめたる纏。罪障の山高く 不可視。往生礼讃に「煩惱深無底生死海無邊」 身三口四意三
 身にて犯す罪三、殺生、偷盜、邪淫、口にて犯す罪四、妄語、綺語、惡口、兩舌、意にて犯す罪三、貪欲
 瞋恚、愚痴、之を十惡といふ。十の道とは十箇條の罪の意、此十罪あるが爲に生死を解脱せんと難しとなり。初の御
 法 華嚴經 三界一心云 華嚴經に「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別」とあるを引く。三界
 を指す。三界一心云 華嚴經に「三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別」とあるを引く。三界
 の三者を別物視するは畢竟見たるに過ぎず。接りの 已心の弥陀 觀經に「是心作 佛是心是佛」
 上より見れば平等絶對にして三者の差別なきこと。 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 に「池底純以金沙布地」とあれば極 教あまたに云 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 樂を以て黄金の岸といへり。 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 る浄土にも九品の 寶の池、功德池 阿彌陀經に「極樂國土有七寶 玉の床 無量壽經に「講堂精舍宮
 別を生ずとたり。 觀經には極樂に生ずる者の優劣を大別して九品とせり。即
 化 量なき命の佛 阿彌陀の設法を無量壽佛と 若我成佛十方云 阿彌陀佛の四十八願に「我若得佛と
 成」 量なき命の佛 阿彌陀の設法を無量壽佛と 若我成佛十方云 阿彌陀佛の四十八願に「我若得佛と
 と解説せり。その次句に十方衆生といふ法あれば茲には、十 本願 本願の たなびく山 新古今集に「こゝに
 方の序辭的に若我成佛の語を用ひたり。何等慈悲の願をなす。 本願 本願の たなびく山 新古今集に「こゝに
 こ白雲の棚引く山や西に 彼國 極樂 墨深の云 墨深は清水。面忘れは願を忘るること。墨深の身と云ひか
 あらう」とあるを借る。 彼國 極樂 墨深の云 墨深は清水。面忘れは願を忘るること。墨深の身と云ひか
 せの花さかりお忘れ 園原や云 新古今集に「その原や伏屋に生ふる若本ありとは見
 ても折りてけりかなし 園原や云 新古今集に「その原や伏屋に生ふる若本ありとは見

四番目 畧三番

柏崎

十月

十方花 若(誦ナシ) シテ母 若(後ハ物狂) ワキ小太郎 墨ツレ僧

口半次上

ヨウク

夢路も添ひて 古里も夢路も添ひ

て古里も帰るや現あるらん といひ越

後の國柏崎殿の古内よ。小太郎と申せ

者よ。いさても頼み奉りし人。訴訟

の事いひて。在録倉まで遊座いひら

唯かりそのよ風のいさちと作せらひて。

考よしの

程なく寒〜あつ給ひし。又馬子息
 花若殿も同〜在鎌倉より鹿座のひ
 ーら。又唐の唐別を歎き給ひ。いゝも
 なく唐浦せよ。かゝる同花若殿の唐
 文の唐形見の唐を賜つ唐入唯今
 吉里柏崎へい。家から道行上乾ぬ。ぬ。ぬ。
 日影も袖やぬらぬら。日影も袖や

又ハ
 雪の下。二通し

ぬらぬら。今行く道ハ雪の下。一通り
 降つ村時雨。山の内をもし湯ぎ行けば。袖
 涙増の旅衣。碓氷の峠打ち湯。湯で。
 越後より早く著かぬ。けり。越後より早く
 し。かゝる程。よ。吉里柏崎の
 著かぬ。い。か。い。〜。唐浦を申かぬ。か。い。ぬ。
 して。い。い。申。い。鎌倉より。小太郎が葉

便も嬉しうありし形見を届くる音
つれある一箇ねを返すかきや
唯ありそあはれなむかひ
其ぬら昔語よありて形見を
見ても涙あひたりや最期のちり
あはれ事ありし言ひを尋ね語り
あはれ事ありし一箇ねを返す

木上

三

唯田の時を思ふに思ふに
最期もあはれし事あり
ありし事ありし言ひを尋ね語り
三年離れて其後あはれも残る
の中あはれなむかひ
あはれなむかひを返すかきや
あはれなむかひを返すかきや
あはれなむかひを返すかきや

木上

三

父が別れい...
 名残も子程の形見あ...
 たの父の恨めや...
 一とて...
 うちよ...
 出づ...
 り...
 一とて...
 出づ...
 り...

思ひ...
 帰...
 悲...
 程...
 早...
 地...

悲^ニ又^ニ修^ニ行^ニの^ニ身^ノの^ニ思^ハふ^ニ事^ハある^ニ
てある^ニ母^ノは^ニ安^ニを^ニ女^ノの^ニ思^ハふ^ニ事^ハある^ニ
あ^ニら^ニん^ニ恨^ハむ^ニの^ニ我^ノの^ニ心^ノを^ニ導^クく^ニ
時^ハ恨^ハむ^ニあ^ニら^ニん^ニ事^ハある^ニ我^ノの^ニ心^ノ
行^ク安^ニ穩^ニの^ニ守^ルを^ニ給^ク神^ノ佛^トと^ニ祈^ル
と^ニ哀^ハむ^ニ新^ノの^ニ心^ノを^ニ哀^ハむ^ニ事^ハある^ニ

日^ノ昔^ノの^ニ者^ノの^ニ信^ニ濃^ニの^ニ國^ノ華^ノを^ニ寺^ノの^ニ

い^ニ禮^ニを^ニ入^ルに^ニ入^ルに^ニ入^ルに^ニ

とも知らず男僧を頼む由作せる程よ。

師弟の契約あり一此程出家させ申

しとぞわいの回毎日如来堂へ伴ひ申す。

ちかみのやまの田んぼに後三十一「(該母)」

あらしのやまのこぼれを笑ふはあはれあはれ

おどろけをよそよそと笑ふはなつかしきあはれ

人に就むいふと給むくちのまきやん

かみもかみも死して別れ唯ひま

志くもたな女も思ひか。この行く入

ちも白糸の 地 刺れいやねらん

げよ シテサシ上 人の身のあだありけりと。誰

ら カケリ 打上 びらこ カケリ 打上 虚言や。思ひに死ありけり

けりと。詠文も ユツワリ 理や。今身のよよ知ら

●獨吟仕舞

れたら テ りて ハ むら ハ ぬ ハ ち ハ 子 ハ の ハ 故 ハ と ハ 思

へ ハ 恨 ハ め ハ 一 ハ や ハ 池ノ邊 憂 ハ ね ハ 身 ハ の ハ 何 ハ と ハ 捕 ハ の

葉 ハ の ハ 拍 ハ 崎 ハ ち ハ び ハ ね ハ り ハ せ ハ 一 ハ 上敷 越 ハ 後 ハ の

國 ハ 府 ハ の ハ 著 ハ 者 ハ 一 ハ ち ハ び ハ 打切 越 ハ 後 ハ の ハ 國 ハ 府 ハ の ハ 思

一 ハ ち ハ び ハ 入 ハ 目 ハ も ハ 分 ハ り ハ ぬ ハ 我 ハ が ハ 姿 ハ 一 ハ ち ハ び ハ まで

草 ハ の ハ 一 ハ ち ハ び ハ まで ハ と ハ 知 ハ ら ハ ぬ ハ 心 ハ の ハ 麻 ハ 衣 ハ 一 ハ ち ハ び

遠 ハ くと ハ 行 ハ く ハ 程 ハ 一 ハ ち ハ び ハ 松 ハ 風 ハ 遠 ハ く ハ 寂 ハ 一 ハ ち ハ び

淨土の國へ時。其樂は法華の樂に勝る。
 内障にして極樂の九品十上の樂に勝る。
 其の樂は法華の樂に勝る。
 此の樂は法華の樂に勝る。
 何れも聲に勝る。南無阿彌陀佛。
 頼も頼も。釋迦の佛。
 此の樂は法華の樂に勝る。

●小話

地

地上

地上

地上

地上

地上

地上

地上

地上

此の樂は法華の樂に勝る。
 内障の樂に勝る。光明遍照十方の。
 樂に勝る。常の樂に勝る。影頼む。
 使念佛由せん。使念佛由せん。
 此の樂は法華の樂に勝る。
 子直垂の別。此の樂に勝る。
 形見の今。此の樂に勝る。

信

乱舞まわして
見せんとてま

隙のあつらひのさむい髪と文の思ひ
知られたるしを如きはまゝに
後生善所を祈らばと思はる
あつらひのさむい髪と文の思ひ
萬何事かまのこゝろに
とやらんを射さるゝ教傳教の道も
達者ありとて又酒宴をのこさるゝ

物著
表上

とて人ごみ乱舞まわして見せんとて
鏡直垂より出だす衣紋を著
あつらひぬり取つて打ちあつち手拍子
人よ囃させて扇おつ取り鳴る籠の水
その一念符名の聲のうちはら撮取の
光明を待ち取らぬ衆來の雲の上より
九品蓮臺の花散りて
果香満ち

地くり上

ミテ

名

地上
果香満ち

●獨吟サシクモ

満ちて人よ黄ぐ。白虹地よ満ちて。空
 けり。せ向の幻相を觀む。
 飛花落葉の風の前より有為の
 轉変を悟り。電光石火の影のうら
 ぶ。まの昔を回顧し。めめて驚く
 べからむ。あらむ。後世の夢と纏む
 り。假の親子の今をたよ。深ひ思ても

●仕舞

せぬ首さきの露の憂か身の置置を所
 誰よ向ま。旅の道。こゝも憂か
 せのからむ。や。悲みの涙眼よ涙り
 思の煙胸よ満つ。つら。つら。を案む
 つ。三界は流轉して猶人向の妄執の
 晴れ難き雲の端の月のは影や明けき。
 真如平等の喜室よ。まらんとたよ。

歎きして煩惱の絆は結ばほしめんと
 悲しき罪障の山高きは此の海深
 いよあやうし此まよ此身を浮めんと
 げよ歎けとも入向の身三口四意三の
 十の首多ありま シテ上 此の法は
 三界一心あり心外無別法心佛及衆
 生と聞く時は是く三無差別あり疑の

あいんあやことこの経路如来唯心の澤土
 ありんくも身ぬべあらま此寺の池の
 蓮のそへ事やあら知ららん唯願
 ちん景頼む者や力の助け船黄金の
 岸よまひんべそましく樂文を極むある
 教もまたよ生れ行く道様どの品あれや
 寶の池の水功德池の濱の真砂敷く

の心は其の業の品の樂を極め量
 つまひ命の佛ありや若我成佛十
 方の世東あり本願起り給をまら
 今のおいら願をまの行くを白
 雲のたきく山や西の空の彼國よ
 迎へらつ津土の縁をいぢちあ入
 給へると符名も鐘の音も曉あてて

燈火の舞かきまはるる南無
 帰命孫陀摩願をい給へや今
 何れもいぢかむをた若と
 云ふもあいにいぢち我の子と
 南にまはるる其のまのまあり
 思ひわらうにふかふと思議や
 佛土のまのまのまのまのまの

辭解

心づくしの秋 古今集に「木の向より生りくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり」とあるを

日に向ふ 日向の國の字を引延べて九州より東方に向いて船出すと云ふ。八重の潮路 遠き波の泡の音を

阿漭 伊勢國津市東方の海濱一帯の稱なり。されども此名は古典に所見無く、唯和歌に基く巷説に

浦 浦の音を借りて、裏の縁にて、一乗の妙なる花 法華經と云ふ。一乗の妙典とも云ふに

墨衣 僧衣。其縁にて紐の音。はや 法華經と云ふ。一乗の妙典とも云ふに

若の衣 新古今抄抄に「若の衣とは出家の衣也」とあり。其縁に後けて衣の玉と云ひかけ、玉の縁に

海士のかる 古今集に出でたる典侍直子の歌を其後後ニテ出の縁とせり。

波ならで 海士の衣の波に乾す隱憂きは常なれど、これは罪業を悔ゆる

身の秋 身の秋とは悲しく物

田夫 農夫。殺生 五戒の一たれば「かくあさまさき

伊勢を 伊勢を無し。古歌に例多し。

浮世の業 浮世の事。尉首 伊勢の海士 海平藏表記に出でたる歌(ま向人もこ

大帖 古今集に「大帖」とあり。伊勢を 伊勢を無し。古歌に例多し。

見る目も軽き みるめは海濱の名。其藻を列るといふ音

海士のたく藻 新古今集に「更

藻 後後後集に「塩竈の浦の烟は絶えに

阿漭といふ海人 此事秋陽雜記に記したれども

阿漭が浮名 此名は古典に所見無く、唯和歌に基く巷説に

若みの海 佛敎にて生死若惱の極

阿漭が浮名 此名は古典に所見無く、唯和歌に基く巷説に

錦木の 陸奥にて患する男、錦木といふ木を女の門に立て、文に代へたる風習ありきといふ故事。

憲清 西行法師の法名なり。法師の法名は憲清(又義清に作る)といひて鳥羽上皇の

執心 執心の心

一樹の宿 一樹の宿にあり一河の

墨衣 僧衣。其縁にて紐の音。はや 法華經と云ふ。一乗の妙典とも云ふに

若の衣 新古今抄抄に「若の衣とは出家の衣也」とあり。其縁に後けて衣の玉と云ひかけ、玉の縁に

海士のかる 古今集に出でたる典侍直子の歌を其後後ニテ出の縁とせり。

とがり。われからは海草に栖む鹿の名、これを我
心からの意に綴らんとて上二句を其序とせり。
く流るる高層月夜。宵ながら入
るといふ意にて入汐にさかかく。
あごの海 此海名美業集に多く見えなれど何れも志摩又は根津の海にて伊勢に關係無し。これと此に出せるは、阿漕の那の「漢」字を「こ」と讀ませ、美業集の「あごの海」と阿漕の詞に綴る事の修辭上の便ありしをなすべし。
伊勢の海 龜山殿七右衛門に「伊勢の海清き渚の夕浪に捲は玉の意を以てたまくと後けたり。」
持綱 手に持ちて魚を捕る綱。
丑みつ 丑の刻は今の午前二時。それより四時までを三分して丑一つ、丑二つ、丑三つと
火車に業績む 火車は地獄にて罪人を乗する車。それに身を乗するを罪業と云ふなり。
目の前の地獄 佛教にて淨土も地獄も己の心に存りと説きたればかくいふ。
紅蓮大紅蓮 共に佛説八宝地獄の中。紅蓮は酷烈なる寒氣に膚肉の焼けて紅蓮華の如くなる地獄。大紅蓮は其狀の
焦熱大焦熱 同上八熱地獄の中。焦熱は火熱に焼かれて膚肉の焦げ爛る地獄。大焦熱は其層基き地獄なり。

四 番 目

阿 漕

九月

ワシテ 阿漕、靈(前ハ漁翁) 旅 僧(又ハ男ニテモ)

早次第上

ヨワク

心づくの秋風よ心づくの秋風よ。
本に向の月ぞまきくまき 此の九州

日向の國の者よ。われ未だ伊勢

だ神宮よ。素らまの程よ。唯今思ひま

ての 日よ向の國の浦舟漕ぎ出で

國の浦舟漕ぎ出で。八重の潮路を

可 漕

打切

遙々と分けこゝ浪の淡路灣通は千
鳥の聲聞きて旅の寝覺を須磨
の浦開の戸もも明け暮れて阿漕
浦よ著るまはつ阿漕浦よしおまよ
けり 宿 急なる程よいはや伊勢
の國安濃の郡とやら申の暫らく
人を相待ち處の名所をも尋ねたやと

思ひの シテキヤ上 はあらで 乾き隙もあ
海士衣身の秋とつと限らま キ上 それ
せを渡のあらひちり入の限らなも
せあ 職 職を替む田女もあらま
かく渡も 教 教の家のまの明暮
物の命を教か 世 世の世 世 世の世
ついで 世 世の世 世 世の世

業のしと程もと取のし程もいし
早^早のしと程もいし程もいし
早^早のしと程もいし程もいし
伊勢の國もいし程もいし
處の申すに 程もいし程もいし
浦と申す 程もいし程もいし
が浦もいし程もいし程もいし

の海に漕が浦もいし程もいし
顯のしと程もいし程もいし
そやあらは白もいし程もいし
旅人や處の和歌もいし程もいし
とくもいし程もいし程もいし
阿漕が浦もいし程もいし
顯のしと程もいし程もいし

海士の目心
 目心給ひら
 賤女給ひら
早かん上
 名所舊跡よ
ヨウラク
 馴れて
 年経ぶら
シテ
 海士の焚く藻の
早
 夕煙 身を焚く
シテ
 伊勢の
シテ
 所よ
シテ
 音も
シテ
 変り
シテ
 聞き給へ
シテ
 物の名も
シテ
 處よ
シテ
 變り

●桐子

難波の
カキ
 處よ
 變り
 けり
 蘆の浦風も
シテ
 伊勢の濱
シテ
 敷の
シテ
 音も
シテ
 聞き
シテ
 給へ
シテ
 藻
シテ
 夕
シテ
 焼く
シテ
 煙も
シテ
 今ハ
シテ
 絶え
シテ
 けり
シテ
 目見
シテ
 けり
シテ
 の
シテ
 海士
シテ
 の
シテ
 志
シテ
 ち
シテ
 なる
シテ
 こと
シテ
 許
シテ
 けり
シテ
 由
シテ
 せ
シテ
 海
シテ
 士
シテ
 衣
シテ
 敷
シテ
 島
シテ
 よ
シテ
 素
シテ
 けり
シテ
 聞
シテ
 き
シテ
 給
シテ
 へ
シテ
 藻
シテ
 の
シテ
 夕
シテ
 焼
シテ
 けり
シテ
 煙
シテ
 も

早
 此浦を
早
 浦が浦
早
 の由
早
 せり
早
 物

可也

〇

語り入り ^{シテ} 總一 ^{シテ} 此浦を阿漕が浦と
 申まらん。伊勢古神宮古降臨より此
 方 ^ゴ 古膳調進 ^{チホス} の網 ^シ を置く處 ^ニ あり。たゞ
 神の古し誓言 ^{チカヒ} の ^チ 海 ^{ウミ} 邊 ^ノ の ^チ 入り
 ぐ ^ニ 此處 ^ニ 多く ^ク 舞 ^ヒ の ^チ 入り ^ニ あり。此
 方 ^ゴ 古膳調進 ^{チホス} の網 ^シ を置く處 ^ニ あり。たゞ
 神の古し誓言 ^{チカヒ} の ^チ 海 ^{ウミ} 邊 ^ノ の ^チ 入り
 ぐ ^ニ 此處 ^ニ 多く ^ク 舞 ^ヒ の ^チ 入り ^ニ あり。

網を引く

阿漕を傳 ^ツ ぬる處 ^ニ あり。此浦の沖 ^ノ には
 伊勢古神宮古降臨 ^{チホス} の海 ^{ウミ} 邊 ^ノ の ^チ 入り
 ぐ ^ニ 此處 ^ニ 多く ^ク 舞 ^ヒ の ^チ 入り ^ニ あり。

ま罪科ツトコを受ウケんや。罪除ツトコの道ミチまへも
 海カミはチまへの名ナのあふ。今イマも阿漕アウが
 うらめや。阿責アセの責セも隙ヒマあつて
 苦ク文モンのシ重オモシある罪ツトコ平ヘラをシ給タマふや。
 恥ハぢや。語コトのシあまうげよ。
 阿漕アウのシ身ミのシ阿漕アウがたどく邊ヘリかゝるまら
 色イロのシ錦ニ本のシ數カズ積ツり。千チ束ツの契ケ志シの
 ▲片カタクセ

ぶ身ミの阿漕アウがたどく邊ヘリかゝるまら
 憲ケン清セイと聞クえ。其ソノ歌ウタへの忍ニび妻メ阿漕アウ
 阿漕アウとシてシんも責セへん。度タク又マタ重オモシあ
 る。悲カナシ一ヒトか。心ココロのシ坐ザ蓮レンの
 幻マヤカシあつら現アれて。執ツク心ココロの浦ウラ波ナミの哀アハレも
 りける。值タ遇ユあ。一ヒト樹ツの宿ヤドりも。
 他タ生マシの縁縁と聞クくものシ身ミも前マヘの
 可カ漕ウ

せの値馬をまごころ松蔭よりらざれ
 給へ墨衣 目も夕暮の夕煙をちほ
 ふかたや漁火の 影もほのろよ見
 えそめて 海鳥も晴るむら霧よ
 ちや手繰の 網の細繰りあへ
 繰りあへー浮かぬはむと見ーよりも
 俄に疾風吹き海づら暗くかき昏れて

早上秋

待語 ツヨク

ちや良もまごころ魚の燈消え失せて
 こころもくまの叫ぶ聲のはは聞え
 ちやあへあへたあへまへまへり
 あとはあへまへまへまへまへり
 ちやあへまへまへまへまへり
 法の中よも一葉の妙あいたのひも
 ちやあへまへまへまへまへり
 ちやあへまへまへまへまへり

らう家よ光の暗から
後シテ海士の
 刈る藻よ棲む中のわれからと音を
 こそはるめせを恨み今宵はまこと
 浪巻いて。青騰の贄の網はまた
 引かれぬようよも隙ありと夕月
 あら。青よりやそ入汐の道や變入
 人目ぞ。紫のびる紫のびるく網の沖

地上 法のことゑ 耳より聞けども猶心よ
地上 罪をのみ持網の浪は却つて猛火
地上 とあるぞや。あら熱や堪へがたや
地上 猶執心の網置かん 伊勢の海
地上 清き渚のたまぐも 伊勢の海
地上 子も磯よも舟の見とまて 唯われのみぞ
地上 あこの海阿漕塩本懲りもせぞ
地上 猶執心の網置かん 伊勢の海
地上 清き渚のたまぐも 伊勢の海
地上 法のことゑ 耳より聞けども猶心よ
地上 罪をのみ持網の浪は却つて猛火
地上 とあるぞや。あら熱や堪へがたや

● 上
ヨウク
仕舞
打上頭打切

丑カみクつハ過シくシるル夜ノのノ夢ノ丑カみクつハ過シくシるル
夜ノのノ夢ノ見トもモやヤ因果ノのノ廻ルりリ来ルるル火ノ
車ノ業積むム数クるルめテ目ノ前ノ
地獄もモ真ニあリげバ怒ラるルのノ氣色やヤ
思ハもモ怨メ古ノのノ思ハもモ怨メ
古ノのノ海女のノ名をえテ可漕が此
浦ノ猶執心ノひク網ノ手馴れレ

うろうろうろ今ノ却リてテ悪魚毒蛇とカ
つて蓮ノ大紅蓮ノ氷ノ身を傷め
骨を碎けけバ叫ぶ息ハ焦熱大焦
熱ノ焰煙雲霧起居隙もあま
冥途のノ責も度重ある阿漕が浦のノ
罪科を助け給へヤ旅人よヨ助け給へやヤ
旅人とシてテまた浪よ入りよけりまたニ

可漕

浪の底よかきよかき

一冊

六

大正十年五月一日印刷
大正十年五月五日發行

觀世流改訂流本
初心者皆宜用



訂正者 丸岡桂

東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行者 土居源太郎

東京市神田區東松下町十二番地

印刷者 鈴木彌作

東京市神田區東松下町十二番地

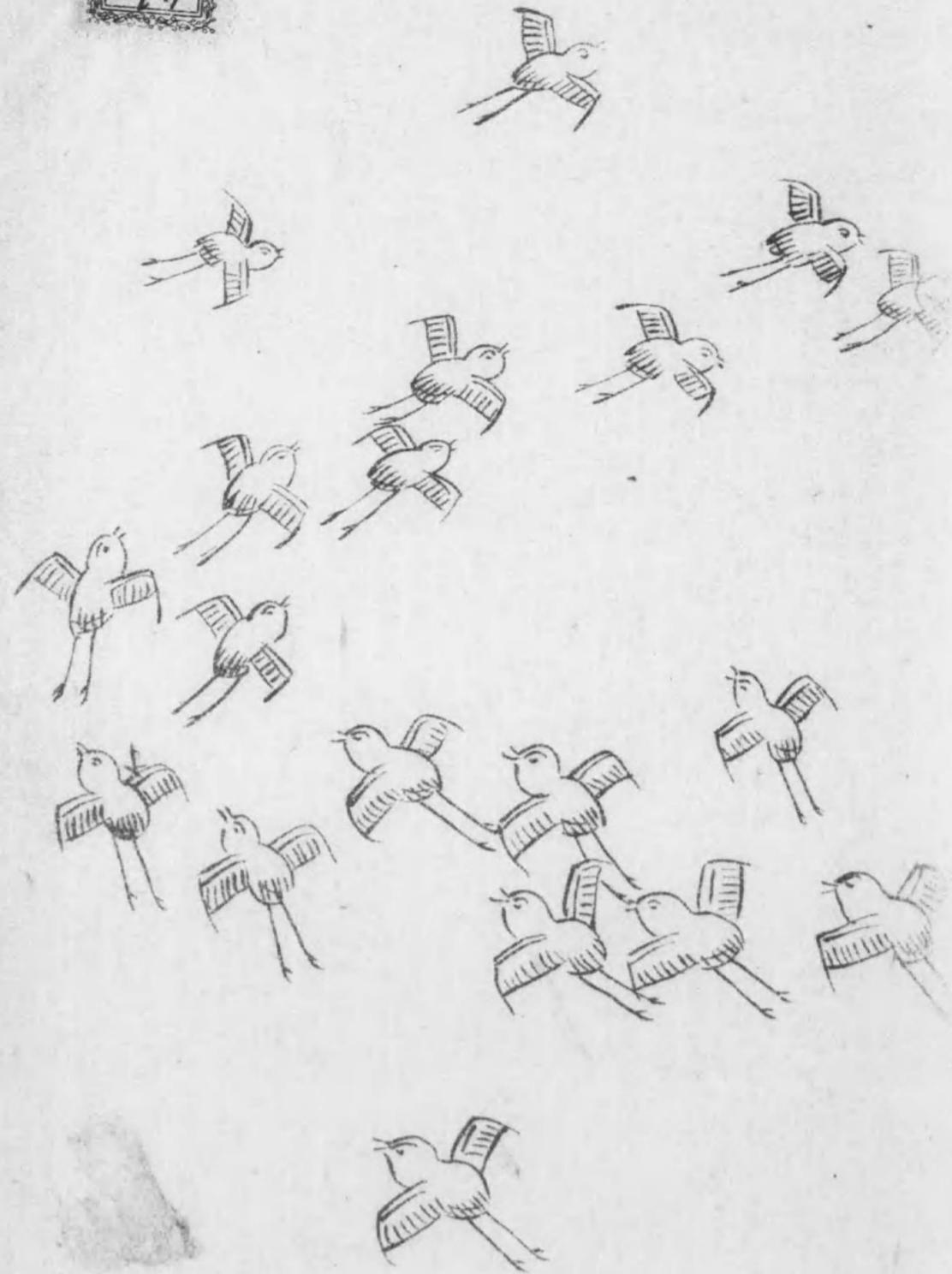
印刷所 信英堂印刷所

東京市神田區今川小路三丁目九番地

發行所 觀世流改訂本刊行會

電話九段 二三四五番
振替東京 一三四七五番

173
1996



終

